

太平洋戦争

■ 学童集団疎開の声

戦時中、東京都渋谷区の笹塚小学校の5年生が昭和19年(1944)9月から20年10月まで現在の砺波市庄川町に集団疎開をしていました。41名が西蓮寺、40名が光照寺でそれぞれ集団生活を送りました。その内の1名の児童の日記を紹介します。



↑ 昭和20年4月光照寺にて撮影(堀幸夫氏の著書より)

8月2日(木)

夜中、空襲警報が出、爆音も聞こえてきた。ここの上空に来たらしいので、すぐ外へ分散退避をした。三十分位たつと、爆音も聞こえなくなったので、中へ入って寝た。少したつと、浅野君が「火事だ」といってきたので、外へ出てみると、空が赤く染まっていた。村井先生がいらっやして「富山市が焼けているのだ」といった。(後略)

8月7日(火)

夜中、又、警報が出た。午前二十分、庭の草むしりをした。十時頃警報が出たが、すぐ解除になった。昼食の味噌汁にはなすが入っていた。今年になって初めてだ。午後、又、警報が出、爆音がしたので外へでて見ると、B29が一機飛んでいた。夕食後、青島駅へ、疎開してくる人をお迎へに行った。(後略)

8月15日(水)

十二時に、ラチオで、恐れ多くも天皇陛下よりの御訓話があったので、皆、聞いた。はっきりと聞こえなかった。(中略) 点呼の時、先生が「戦争は一まづ終わった」とおっしゃった。それは米国が原子爆弾といふのを使用して、広島空襲し、四機で二十万人も殺したからだ。(後略)
(堀 幸夫 2010『少年たちの日々～日記と手紙が語る学童集団疎開～』)

■ 市内の戦争遺跡

■ 般若村分会射撃場跡

般若地区在郷軍人分会では実戦に備え、福山地区内の大堤(砺波ロイヤルホテルの横)を利用して射撃場を作り、軍事教練用の実弾射撃場として市内の軍人に提供しました。



↑ 今も立つ標柱(砺波市安川)

■ 食糧不足を補うために

庄川の松川除堤防を開鑿して大豆や南瓜を育てたり、庄東地区の丘陵部では山林を切り開いて、そば・サツマイモ・馬鈴薯を植えたりしました。また、朝鮮人を使って安川新(現在の砺波市福山)の堤の土手を高くして溜池兼用の大堤にするなど、食糧を増やすことに努力を払いました。

■ 雄神地下工場跡

太平洋戦争末期、司令部偵察機の地下工場が市内に建設されました。

昭和19年(1944)7月、東条内閣は最後の閣議で、全国に地下壕を掘ることを決定しました。米軍の空爆や上陸作戦を予想し、本土決戦に備えるためです。

三菱第十一航空機製作所は名古屋から工場を疎開し、富山県の大門工場に生産の拠点を移しましたが、空襲に備えてさらに地下へ移すことを計画し、雄神村(現在の砺波市庄川町三谷周辺)に工場を建設することにしました。

当所の予定は7,300㎡の範囲に20本のトンネルを掘り、機械部門を移して製作加工し、それを柳瀬村(現在の砺波市柳瀬)の最終組立工場へ運搬し、隣接の飛行場で試験飛行を行う計画でした。

建設工事には多くの朝鮮人労働者も投入されました。

最終的には16本のトンネルが掘られました。機械の搬入は行われることなく終戦を迎えました。

戦時中に極秘に建設されたため、近年まで忘れ去られた存在でした。



↑ 現在の地下工場跡の様子

45年8月18日の完成比率

名称	率
地下工場	4.6%
半地下工場	4.0%
最終組立工場	4.0%
宿舎 志A	8.0%
宿舎 志B	1.0%
消火器	7.8%

注:オガミ(Ogami)村は富山県高岡市の南方約9マイルの地点に位置す。飛行場にある最終組立地下工場は約3.2マイル



↑ 地下工場の位置

(米国戦略爆撃調査報告書(18巻)掲載の「分散平面図」松本文雄 2006『司令部偵察機と富山』より)

